琵琶楽コンクール

九月十六日(日)昼十一時東京銀座ガスホール、主催日本琵琶楽協会。出場者各流派三十七人。採点審査中に半田淳子（敦盛）、小沢錦弥（新撰組）両氏の演奏があった。

第十回錦心流新進演奏会

九月十六日(日)昼零時半大阪天神橋朝陽会館、主催小川吟水氏。金剛石ー吟水会員連吟▼菅公ー中森▼白虎隊ー関川昌宏▼城山ー増田剛水▼厳流島ー金寄靖水▼別れの盃ー小西甫水▼（以下賛助出演）西郷隆盛ー徳島近藤、十河▼本能寺ー大阪中野岑水、住田紘水▼信夫ケ里ー名古屋吉見白水▼湖水乗切ー大阪養老駿水▼舟弁慶ー同稲葉卓水、杭東詠水、中野淀水▼楊貴妃ー神戸楊嶽水▼河中島ー名古屋三輪糺水▼敦盛ー徳島内田欽水▼楠正成ー奈良尾山好水▼俊寛(下)ー広島江原錦和▼五条橋ー京都山田明嶺、平井春嶺▼淀君ー神戸三浦蓮水▼新撰組ー会主小川吟水。

藤巻旭鴻演奏会

九月二十三日(日)正午東京千代田区大手町農協会館、主催旭鴻会。（次号詳報）

近県親善錦心流演奏大会

九月二十三日(日)昼十二時半秋田市大町協働社大町ビルホール、共催一水会秋田支部・秋田琵琶連盟・後援会。（次号詳報）

琵琶まつり木原綾子演奏会

九月二十四日(木)昼十一時東京日本橋東京証券会館、主催木原綾子女史。（次号詳報）

ちくぜん琵琶の会

九月二十四日(木)正午神戸市生田区楠町文化ホール、主催柴田旭堂会。（次号詳報）

ラヂオ琵琶放送

八月三十日(木)午後三時十分NHK・FM。羅生門ー原島旭粧女史、（録音）白虎隊ー故榎本芝水氏。

九月十三日(木)同右、衣川ー笹川旭鳳、時雨曽我ー木原綾子両女史。

―（予　告）―

○ **薩摩琵琶正絃会演奏会**　十月六日(土)昼、東京日本橋第一証券ホール。

○ **第十一回筑前琵琶橘会全国演奏大会**　十月六日(土)午前十時、大阪東区本町四丁目大阪本願寺津村別院（北御堂）大講堂。

○ **京都琵琶協会十月例会**　十月七日(日)昼一時、本部平井会長宅。

○ **京都伏見稲荷神社秋季大祭に琵琶献奏**　十月十一日(木)昼一時、大阪琵琶同好会協賛。

○ **都錦穂演奏会**　十月十六日(火)昼東京日本橋第一証券ホール。

○ **物故会員追悼演奏会**　十月二十一日(日)昼十二時半、京都東山仁王門前本妙寺本堂。京都琵琶協会・一水会京都支部・四明会共催。

○ **琵琶と詩吟詩舞の会**　十月二十八日(日)正午、西宮市夙川公民館松下ホール、三浦蓮水会・一水会神戸支部共催。東京、名古屋、富山、大阪から有名人ゲスト出演。

○ **名古屋秋声会秋季演奏会**　十月二十八日(日)昼十一時、名古屋市大須中小企業福祉会館、主催前田秋声氏。東京その他の名手ゲスト出演。

○ **赤心流秋季琵琶大会**　十一月三日(木)昼、静岡市城内婦人会館、主催赤心流鶴翁氏。東西の名手数氏ゲスト出演。

あとがき

暑い長い夏が終って中秋の爽快な季節となった●前号の本欄で京都祇園の井上八千代さんの言を昭介したところ、大きな反響があり共鳴のお手紙を数通頂いた●歌謡界の大御所故古賀政男さんも生前、歌は心でうたえと常々後輩たちに教訓されていたそうである●本紙九月号で「薩摩桃山琵琶の出現」を報道したが、最近、これまでよりも一段と良い楽器の創作に成功したと製作者柏木篁道氏からの私信に接した●編集子は柏木氏の提灯持ちをする訳では決してないが琵琶界発展の一助にもと敢えて一筆書き添える●本号は記事が多くて貴重な二、三の寄稿などを次号に廻すのやむなき結果となった、悪からず御諒承を乞う。

昭和五十四年十月一日発行（非売品）
編集発行者　村水　植寛
所　京都市津之江北町一一ノ二三
〒569　高槻　紘社
電話　〇七二六（七三）六〇五一番

琵琶機関紙　京絃　第三〇四号　京絃社

琵琶（一二）

―忘れられんとする音の世界―

地神琵琶の成り立ち（上）

村山道宣

六柱のうぐいす琵琶

私は地神盲僧の人達を訪ね、各地を廻って歩くうちに、彼等にとって最も重要な法具である琵琶そのものにも関心を持つようになった。私は各地で多くの琵琶を見た。中でも私が特に興味を持ったのは各地に散在する数面の六柱のうぐいす琵琶であった。

この琵琶は近年では殆ど使われなくなってしまったが、現在でもこの六柱のうぐいす琵琶やその変形したものと思われる琵琶を使っている例は、佐賀県や長崎県の延岡地方などに見られる。また私は、長崎県の平戸島で一面の古いうぐいす琵琶を見たことがある。琵琶の制作年代は虫喰いの様子や、表面に塗られている漆の加減などからして、江戸時代も相当遡る時代のものと思われた。ところが、その琵琶は棹の部分だけが取り換えられていた。その琵琶には五個の柱が付けられていたが、恐らく棹を取り換える以前は六個の柱が付けられていた州各地に於いて〝くずれ〟などの語り物が盛んに行われ、琵琶がその音楽的情緒を演出するための効果音として使われるようになって行くとともに、盲僧や琵琶師達にとって琵琶の最上部の柱の必要はなくなり、六柱の琵琶に代わり、五柱の琵琶が次第に主流になって行ったのであろう。即ち、平戸島に於いても五柱の琵琶が主に使われるようになって行ったと思われるのである。北九州や宮崎県の延岡地方など各地に散在する六柱のうぐいす琵琶の存在は、盲僧琵琶の古い音律形態を暗示しているものではないかと私には思われたのである。私は九州地方の盲僧の人達によって用いられていた琵琶が、かつてどのような音律や形態を持っていたのか更に探ってみることにした。

三徳院の琵琶

私は熊本県の八代（やつしろ）から人吉を経て、宮崎県えびの市加久藤（かくとう）にある三徳院という天台宗常楽院法流に属する盲僧寺を訪ねた。三徳院は南九州の盲僧寺の中でも特に有力な、由緒ある寺であった。この三徳院が史上に顕われるのは、十六世紀半ば（永禄年間）三徳院の盲僧、菊一が合戦の際、占いによって大手柄をたて、戦後島津義弘により宅地と田禄を賜わり、旧来の三宝院を三徳院に改めたという事蹟が記されているのに始まる。その後さらに三徳院は義弘より、知行五名、日向十三地域の家督（壇徒を有する権利を持つ僧侶）を許され、南九州に於ける有力な盲僧寺として長く続くことになる。

三徳院には私の期待通り、相当古い立派な一面の琵琶が御堂に置かれていた。天神は外れ、虫喰いが一部ありはしたが、素人目にも名工が贅沢な材料を使い念入りに作ったものとひと目で判るほどの上等な品であった。三徳院の住職は、この琵琶のことを地神琵琶と呼んでいた。（常楽院法流の盲僧達に依って、廻壇法要の際、用いられる琵琶が地神琵琶と俗称されることは前に述べた。）私はその美事な漆塗りの琵琶に暫く見入っていた。覆手は大きく、腹板の上部には装飾のない小さな半月があけられ、側面には三～四センチの磯が取ってあった。私には、その琵琶が柱の部分は別として、形態的には平家琵琶の特徴を

全て揃えているように思われた。しかし、残念ながら、天神や覆手は既に失くなってしまっていた。（この項未完）

乃木大将

―封建士族的生き方貫徹―

佐藤忠男

日露戦争は多くのヒーローを生んだ。日本海々戦の東郷元帥や、旅順港閉塞で死んだ広瀬中佐など有名だが、最も多くの逸話を残して国民に親しまれたのは乃木希典陸軍大将であろう。

日露戦争最大の激戦のひとつだった旅順港攻略を担当した乃木大将の第三軍は、近代的な要塞に当時の最新兵器である機関銃を備えたロシア軍に対し、歩兵の肉弾突撃を繰り返して多くの犠牲を出した。投入された日本軍は十三万、その半数に近い五万九千人が死傷したのである。困難な作戦だったことは事実であるにしても、これだけ犠牲が大きかったのは、乃木大将とその幕僚たちが、古い精神力主義に固まっていて、近代的な戦術を知らなかったからであるという批判が多くある。

にも拘わらず乃木大将が尊敬されたのは、この旅順作戦で、大将自身、二人しかない息子を二人とも戦死させたことと、いかにも人格者らしい人柄であったからである。そこから、大将が多くの部下を死なせたことを心から申しわけなく思っていて、戦後、遺族に侘びて歩いたという物語が生まれた。なかでも「乃木大将と辻占売りの少年」の物語は、浪曲にもなって人々を泣かせた。父が旅順で戦死したために、辻占を売って暮らしている少年に、身分をかくして旅をしている大将が出会う話である。部下に犠牲を強いたが、大将も自分を犠牲にしているのだと考えることで、人々は泣いて納得しようとしたのだ。

それはしかし、犠牲を惜しまずに精神力で押し通せば勝てる、という考え方を生んで、日本人のものの考え方を非合理的な方向に押しすすめる大きな力にもなった。

乃木大将はのちに学習院の院長に就任して遺族の子弟の教育に当った。その教育は、院長自身が野戦に於ける軍人と同じ徹底的に質素な生活を実行してみせることによって、自ら質実剛健の気風に感化させるというものであった。そのことによって広く尊敬もあつめたが、学習院出身の作家武者小路実篤などは、当時母校の講演会で壇上から乃木院長をにらんで「軍人は人間のねうちを知りません」と叫んだ。新しい人道主義的な社界をめざす先駆的な一部の若者たちには、大将の封建士族的な古さがやり切れなかったのである。

しかし大将は、明治天皇の崩御に際して、静子夫人と共に殉死することによって、時代錯誤な封建士族的な生き方を貫徹してみせて、世の人々に衝撃を与えた。この強さに負けぬ強さを、若い自由主義者たちは容易に持ち得なかった。

故
錦穣全集
テープ全二十四巻
故人七回忌にあたり六十三曲収録の別冊歌詞集を和装帧にて刊行。テープ五巻以上お申し込みの方に添付頒布。
一巻より十五巻まで演奏後に錦穣自身による芸談を収録
各巻　三、〇〇〇円（送料　二〇〇円）
お申込み先　錦びわ本部
〒176　東京都練馬区旭町二ノ二二ノ四
電話　〇三（九三〇）四四五八番
連絡先　京紘社

我が道を行く

六十五年（六九）

西郷天風

去る六月は、我が親愛する「京紘」紙が発刊以来、二十五周年の永きに亘り、一回の停滞も見せず、月歴三百号を重ねられたことは、

主宰者植村翁のお人柄もしのばれて洵に目出度く、斯界の一人として衷心よりお祝詞を申し上げる次第であります。

思えば私が「京紘」を初めて知ったのは、今は無き盟友長浜南城氏のすゝめに応じ、共に投稿を約したときのことで、長浜氏はその折、すでに新作の歌詩数曲を用意しておられた。

その南城氏と私との交友は、実に明治末期から大正にかけての事で、当時南城氏は英国へ留学の準備上、外国語学校在学中で、遠く父母の膝下鹿児島を離れ、東京の近郷川口市の某歯科医院方に在り、あるとき私達グループの琵琶演奏会が川口座で催されるに当り、これ幸いと程近き歯科医院を訪ぬれば、折よく南城氏は学友を門前に送り出た所で、私と顔を合わせるや嬉々として二階に上り、忽ち琵琶を取り出すほどの御機嫌だった。

かくて、当時大流行の兆に満悦の琵琶談義も楽しく、近々、再会を約して別れたが、その近々が実に四十年ぶりとなった。そのいきさつは後日の稿にゆづり、ここでは、前稿に続いて、昭和十五年の秋十一月、つまりその頃、年中行事の如く私に課せられていた台湾の製糖会社や、公学校等の琵琶巡演を了え、上海に戻る船中に於て知り合いとなった傷痍軍人に誘われ、揚子江上流の港九江の野戦病院まで同行し、慰問演奏を引受けた時の事である。

この最前戦にある病院としては、設備も整っており、長い病棟が中庭を挾んでUの字形に結んだ廊下の中央、医務室前に演奏台は設けられた。

先づ、私が演奏席についた時、中庭の枯草の上に敷かれた数枚の座席には、百人ばかりの兵士が元気な顔を見せており、係の士官の挨拶に応じ、琵琶を抱えて「天照す、日の影うつる。…」と謡い出せば、目の前の椅子や敷物に陸続と将校たちが着席し、やがて、演奏が終る頃、私の周囲には電線や工具類を手に、どうやら工事係の兵員が、琵琶の終るのを待つ様子だった。

かくて別室に案内された私は、暫く休息の後再び演奏席に着けば、そこには高級品に属するマイクが備えられ、左右の病棟には電気コードが張りめぐらされていた。これはまさしく病棟に呻吟する兵士たちに、この慰問を充分に楽しませんが為の工作であった。

元来、第一線にある野戦病院ともなれば、殆んどが屋外に等しいバラック建てであるのに此処は特別だった。長い病棟を左右にして、なかば枯れ果てた中庭をUタウン形に抱き、天井を直接高い天空に突き抜け、正面もまた同様音響を止め支える何物も無きまゝ、目前に見る低い禿山の上を滑りながら、遙かな空間に吸い込まれる有様で、渾身の努力も功をなさぬ恨みがあった。

そこえマイクフォンの出現はまさに救いの神で、労力は半減し、慰問の実は倍加した。今迄の銷沈感は解消し、勇気百倍して「錦之御旗」の後を「九連城」それに、当時流行の軍歌露営の歌、愛馬進軍歌、愛国行進曲。因みにこの三曲は、さきに露営の歌（勝って来るぞと勇ましく）を、そのまま琵琶歌として大好評を拍したのに力を得、続いて愛馬進軍歌、愛国行進曲をも加え、三部曲として一括し、一時間物として上海の大東放送局より何回も放送し、私只一人の独占曲だったが、ことでも大いに面目を施こした。それは、将校諸卿の評として、この三曲は琵琶で聞く方が遙かに躍動を感ずる、というのであった。

さて、前日この九江に初めて来た時、私の目を驚かしたのは、我が偵察機らしいのが一機、真っ逆様に突込んだまゝ水際に逆立しており、更に、あたり一面石炭酸の臭気が鼻をつくばかりで、細菌戦に訴えざるを得なかった敵の窮状もさる事ながら、我方の狼狽も只ならず、港には我が軍関係以外の人間は一人も居らず、生活上一つ時も欠く事のできぬ生水は、遙か奥地の盧山から間断なく運んでいる。その盧山こそ敵が重慶に引込むまで軍議を練る重大な拠点、即ち盧山会議の開かれた山岳で、支那には甚だ稀な、山紫水明の名にふさわしい別天地であり、その繁栄の様相は温泉街に等しく、又箱根や軽井沢もかくやと偲ばれる歓楽郷でもあったろう。

しかし、今は満足な家屋はなく、住民は総て南麓の蕃陽湖方面に追放された。それは敗残兵のゲリラを封じる為で、慰問演奏の夜か

ら翌朝にかけての高射砲作戦がそれだった。

私はその翌日から、盧山と九江の間を往復すること数日、死の繁華街に我が三井の別荘を見、盧山会議の跡をたずねるうち、図らずも北麓の河畔、葦の葉蔭に白楽天の琵琶行詩廟を発見して、胸のときめきをおぼえた。

五絃閑話（一）

冷夏の演奏会

水藤五郎

今年はことのほか冷夏であって東京近県は、思いもかけぬ快適な七・八月であった。今年はその為か、私は海にも山にも行くことなく、幾分の暑さの中で、ひたすら東京ぐらしを楽しんだ。楽しむと云っても、冷たい豆腐にえだ豆、ビールが唯一の避暑法で、花火を見ながらの連夜の楽しみであった。例年になく忙がしい夏であって、いくつかの作曲と原稿に追われて苦しむことが多かった。作曲も原稿も、夏の関係ばかりでなく、進み具合が悪く、時々自信を失いながらも、なんとか作り上げることが出来た。

その思わぬ苦しみの間に、京都三美会の出演があった。矢吹旭美津、田中鵬水両師の主催するこの会は、今回で十回目、その為め今回は十周年記念として、全国から、特に山形県の酒田市、九州の博多、広島市等から二十名に余る青少年少女の琵琶人を呼び集めて、子供の為めの演奏会を企画したとのことで、私もこの記念会に出演の機会を得ることが出来、各地から集まる小さな人々の演奏を聞けることを楽しみにしていた。

八月十九日(日)京都山一証券ホール。私は〝盲目景清〟の出曲、プログラムを見ると、後に鈴木流泉、山崎旭萍の両師が控えている。つまり終りから三番目。琵琶会は賛助が後半になる習慣があって、幕が上がるとさっきまでいたお客様が消えていることがよくある。

主催者にすれば、遠方からの来演ゆえ、地元の門人や絃友よりは後に出演をと考えて、プログラムの終りにすえるのが常となる。今回も名人山崎師を最後にして、東京からの二人をその前にと考えたのは当然であったかも……。これは今に始まったことではないし、驚くにはあたらないのではあるけれど、賛助を出す位置は功罪判定が難しい。長時間のプログラムであれば、せめて真ん中の後に、飽きぬ頃に登場させてもらいたい。

かつて、水藤錦穣さんはまだ出ませんか〃と云って楽屋に訪ねてくることがしばしばの会が地方によくあった。錦穣をトリにしてプログラムを作る主催者の企画と、錦穣が出るまで待ち切れずに帰ってゆく人々の事情との判断が難かしいものであった。勿論、これは他の名人大家についても云えることであったが、あまりの会の長時間に、如何なる名人の神通力も通じない様に思えたのは私ばかりではなかったのだが、又、名人が登場した時、客席で聴き入る人は琵琶人であって、本当に聞いてもらいたい一般の人々ではなかったことがよくあるのであった。このくり返しが一般の人を琵琶会から遠くさせた一因でもあった。

こんなことを思いながら手にした三美会プログラムであったが、いつもながら弁財天の絵が美しい。そこで御祝いに弁財天の贈呈を考えた。義妹の刺繍はプロ級なので、弁財天の額を作らせることにした。等身体に近いこの弁財天を何色もの糸で刺繍して、額に入れて送るのであるが、既に春に製作したのが我が家の守護神にもなっている。これから思いついたことであったが、矢吹、田中両師が弁財天を親愛しているのであってみれば、これは私の弁財天以上に、その恵みを発するものかもしれないと思った。弁財天に添えた色紙に、拙ないながら「弁財天妙なる楽のしらべきて佳き日迎うる三美会かな」と一首をしるしてはみたが、少々恥かしい歌であった。

この額を先発させて、私は十七日東京を発った。一日、芦屋に住む兄を訪ね、十九日の朝京都に入った。ロビーで名古屋から声援に見えた前田旭城師のお元気な声に送られて楽屋に入り、荷物の楽器を置いて客席へ。もう可愛いい琵琶人の演奏が始まっている。

驚いたことに、ロビーに大きなテレビが備えられ、舞台の全てがビデオに収録されている。今夏は京都で有意義な芸の一日を過ごすことが出来たこと、冷夏であったこと等、良い年良い年。

た。私は、前からこのビデオによる記録は、琵琶界にとって重要なことであると思っていた。悔まれるのは、何故十年か二十年以前にこの発明が出来なかったのであろうか、である。もしそうであれば、名人の数々を収録することが出来たであったろうと思う。今はテープでしかその人々の芸を知ることが出来ないのであって、撓、絃の指あしらい、姿勢等々を知ることが出来たろうにと思う。これからでも遅くはない、自分もビデオテレビをと思ったのだが、肝腎のテレビを捨てていることに気が付いて〃シマッタ!!〃と思う。

舞台では熱演が続いて、頼もしい子がぞくぞくと出演、まだまだ琵琶界も灯がつづくと嬉しく思ったりした。

それにつけても、この可愛い人々の指導をする各師の努力の並々ならぬものを想い、今回の企画を実行した三美会の皆様の努力をたたえる感が深かった。

あの日出演した可愛いい皆様、頑張って今後も練習して下さい。今度は、東京であの様な会を、いや日本各地で開きたいものです。もっともっと多くの幼な出演者に集まってもらって、そして、聞きに来る人々も同じ位の人々になればもっと良いのですが……。

私の出演は五時十分頃、景清は大曲なので、充分に稽古はしたつもりであったが、それが逆に作用して声がつかれたようで、思わぬ誤算をしてしまった。稽古し過ぎもダメで、稽古しなければ更にダメときては、どうにもならない未熟な我々である。今夏は京都で有意義な芸の一日を過ごすことが出来たこと、冷夏であったこと等、良い年良い年。

吉井良三

紘追いて　京、阪、神と西東
テープを片手に　幾度か酔いぬ

北の国　東、南と土地移り
人情変れど　紘は一筋に

「琵琶と父」の記事を読んで

お盆を迎えた八月十四日、京都新聞朝刊「こまど」にめずらしい記事が目にとまった。筆者は桃山町団地の主婦、堀江しのぶさん。全文を掲げました。

×　×

かすみたなびく　山々の
さかりの花を　ながめんと

幼いころから聞かされた父の琵琶（びわ）の一節がいまも消えることなく胸深く刻みこまれている。

父は若いころ琵琶を習っていた。そしてそれが父の一生の唯一の心の支えとなり友となっていたようだ。私はよく父からバチの持ち方や、琵琶の節を手を取るように教え込まれたけれど、難かしすぎて、いつもうわの空であった。だから、ほとんど琵琶のことは、わからないままで大きくなってしまった。今になって悔やむばかりである。

もう十年も前のことだけれど、父は、のど自慢大会に出場するチャンスに恵まれた。愛用の少し古びた琵琶をしっかり抱えて舞台に立った父。鐘は二つ鳴った。「いい思い出になった」とうれしそうに笑いながら、ビールを飲んで満足そうだった父の姿が、昨日のことのように浮かんでくる。人前で琵琶をうたったのは、あとにも先にも、これ切りであった。

その父はもうこの世にいない。のど自慢を最後に、父のうた声はもう二度と聞くことは出来なくなってしまった。今年はその父の七回忌。父の大好物のお茶をおみやげにふるさとへ帰ろう。お盆には母や弟たちと、父の琵琶物語りをかたり明かそう。

×　×

今は亡き父への美しい思慕が、平明に、こまやかに表現されている。私は心うたれて、くりかえし読みました。

お盆に相応しいお話としてご披露いたすと共

に、合せて琵琶愛好の私たちのよろこびをも身に感じます。

（八、二〇、　鴨水記）

一琵琶人として

東京　山口豈水

……さて、京絃第三〇二号に掲載されました中條義治さんの「感想」という記事、全く感銘しました。一口に云えば、正に我が意を得たりという処です。

琵琶人でないお方が、あのようなことを書いて下さると、一般の人が琵琶の弾奏をどんな風に感じて居られるのかがよくわかり、琵琶人には大変参考になると思います。

最近一部の流派に、弾きながら歌うというのか、うたいながら弾くというのか、うたと弾法を同時にやるのを得意として居られるように感じられる方々がありますが、歌詞が弾法に災いされて、何を云っているのか、よく聴き取れない場合が多々あります。この人など中條さんが指摘された、演奏者の一人よがりと見られる点の代表格であります。

弾法の上手なことは結構であるけれども、琵琶楽というものは「語り」、つまり歌が主体で、弾法は従と考えるべきものであるので、その域を脱してはならないと思う。器用さにまかせて、長く大きな音で弾きまくれば良いというものでは決してないと私は考えます。

どうか今後も、あのような第三者からの投稿がありましたら、どしどし掲載されんことをお願いいたします。

近江八景

大津市　川口伸子

（選一名）

堅田落雁比良雪　湖上風光此処収
煙罩帰帆矢橋渡　風吹嵐翠栗津洲
夜寒唐崎松間雨　月冷石山堂外秋
三井晩鐘瀬田夕　征人容易惹郷愁

時代に流れる近江八景

三井寺の鐘の音　澄み渡る夕暮れ　初雁も
堅田に声たてて落ち来ぬ　ー。幼いころ聞いた、うろ覚えの近江八景の歌である。

今年は暖冬で、比良の暮雪はまばらだったが、それでも三井の晩鐘、瀬田の夕照とともに自然自体は昔と変わらない。しかし鐘の音が響き、夕日が染める風景の何と変わってしまったことか。

琵琶湖の南端、瀬田川の入口にかかる近江大橋の向こう側から、大津の町がよく見える。造成して天に至るとばかりに比叡山から石山寺にかけて、新興住宅地がいくつも山腹をけづりとっている。

立ち並ぶ高層ビルやマンションにさえぎられて、石山の名月ものぞまれず、渋滞を繰り返えす車の排気ガスに、栗津の晴嵐はかき消されてしまった。草津の矢橋には帰る舟もなく、多くの反対の中で犠牲者を生みながら、人工島計画がすすめられている。

唐崎の老い松にふりそそぐ雨の音も、夜昼なく走る車の騒音にかき消され、堅田の浮御堂は渇水でおり立つ雁もとまどうことだろう。

今や八景は有名無実となったが、ただ過去を懐かしみ、「昔はよかった」と嘆くわけではない。時の流れに取り残され、消えゆくのも自然のなり行きだし、現代には現代の美も風情もあると思う。

京都琵琶協会の納涼八月例会

八月例会は久しぶりに懇親と納涼を兼ねた集まりにしては？、と誰からともなく提案があり、馬場鴨水氏の斡旋で洛西の仙境嵯峨嵐山の料亭対嵐坊に、十一日午後から三十五度の炎暑を克服して、協会員十二名、来賓お二人の計十四名が出席。会場の対嵐坊は、清流

右から
（前列）馬場鴨水・水内媛水・平井春嶺・梅原旭濤・牧南水・植村寞水・伊達画伯　（後列）楊嶽水・林旭萌・岡本旭村・山岡旭清・荒木旭媛・矢吹旭美津

保津川に架かる渡月橋から西百メール、川渕の樹木生い茂る奥にある静かな料亭で、保津川を隔てた対岸の山麓には、琵琶歌に馴染の深い〝平家物語〟の小督局が隠棲したという旧跡が指呼の内にある。御存じ高倉帝の寵愛を受けた小督局が、皇后建礼門院徳子の父清盛に追われて隠れ棲んだ仮屋に、源仲国が帝の命を受けて寮の馬にまたがり、琴の音をたよりに探しに来る。『楽は何ぞと聞きければ、夫を想うて恋うという想夫恋の曲なり…。』月明かりの濡れ椽に愛しい人を想い爪を走らせていた小督局の涙の跡が偲ばれる。また小督塚はこの対嵐坊の近くに在り、今でも哀しい悲恋物語に供華が絶えない。そのほか昔から伝えられる旧跡や寺院などの数々はこの附近に多くあって枚挙に遑ない。

会場の座敷は程よく冷房が利いて心地よく、浴場で先づ汗を流して演奏に移り、山岡旭清女史の「小督」を序奏に薩、筑数氏の演奏が続いたあと、庭に出て記念撮影を済ませ、豪華な山海の珍味を前に宴に移って、飲むほどに酔うほどに、琵琶よりも上手な隠し芸が続出して興尽きるところを知らず、名残り惜しくも薄暮散会した。

（出席者）馬場鴨水、林旭萌、楊嶽水、梅原旭濤、矢吹旭美津、山岡旭清、牧南水、荒木旭媛、水内媛水、平井春嶺、同夫人、植村寞水、来賓伊達画伯、同岡本旭村。（敬称略）

一水会神戸支部・蓮水会のゆかた会

七月二十九日(日)西宮市夙川公民館。会員の外大阪神戸から来賓十一氏も出席。城山ー田中珠水▼湖水乗切ー木宮梅水▼紅葉狩ー吉田秋水▼菊水の旗ー村上湧水▼白虎隊ー関川昌宏▼平泉懐古ー川上琵水▼山科の別れー杭東詠水▼重衡ー田村魁水▼恩讐の彼方ー中野淀水▼別れの盃ー小西甫水▼秋風故郷の山ー木庭旭山▼本能寺ー田中歉水▼戦艦大和ー田村魁水、楊嶽水▼舟弁慶ー小川吟水▼盛綱先陣ー会主三浦蓮水、外に詩吟八題。このあと一同楽しく会食、余興も続出し八時散会した。

京都琵琶協会九月例会

九月二日(日)昼一時本部平井会長宅。水内媛水ー河内の宿▼山岡旭清ー伊豆の御難▼田中歉水ー戦艦大和▼馬場鴨水ー本能寺▼牧南水ー敦盛▼梅原旭濤ー横笛▼平井春嶺ー老蘇の森▼演奏なしー林旭萌、矢吹旭美津、安住旭康、荒木旭媛、植村寞水。このあと来る十月二十一日協会・四明会・一水会支部共催の演奏会の演奏曲目と出演順抽籤や九月三十日その準備会を本部で開催の件などを協議してビールで乾盃、会食して七時散会した。

大阪堺開口神社秋季大祭に琵琶献奏

九月八日(土)昼三時同神社瑞祥閣、協賛大阪琵琶同好会（琵琶の外各種芸能、次号詳報）。

鎌倉鶴岡八幡宮奉納琵琶奏

九月十四日(金)昼二時、責任者伊集院牙城氏。政子鎌倉入ー牙城▼静幻想曲ー水藤五郎、木原綾子、水藤万里子・小紘藤巻旭彰・立方一▼五条橋ー石井旭良、若林旭洋、小原旭成、板倉旭富、斉藤旭芳、青木旭洲、井上旭慶。